

No. 41

1978.

3. 15

岐阜の博物館

編集兼発行

〒488 羽島郡川島町
エーザイ工団
内藤記念くすり博物館 内
岐阜県博物館協会
TEL (05 8689) 3111
内線 540
振替 名古屋 70106



峰一合遺跡と中部山岳考古館(下呂町)



「博物館とは何か」というテーマで、いろいろな人々に論文を書いてもらったら、興味つきない問題点が浮きぼりにされてくるにちがいない。日本には「博物館法」があり、博物館とはの定義もされているが、法による登録博物館だけが博物館とはいえないからややこしい。東京国立博物館という超一流の博物館は、法律によれば博物館でも博物館相当施設でもないのである。まして現実には、博物館という名前は法的規制があるわけでもなく、だれでも勝手自由に使えるので、規模も目的・性格・内容・活動、あるいは設置者も管理者も、全ての面で千差万別のものが「〇〇博物館」として立派に世の中に市民権を得て存在している。そして、全く個人ひとりのコレクションから出発した、一室だけのささやかなものでも、立派な模範となる博物館そのものが存在している。逆に博物館そのものでありながら、その言葉のイメージを嫌って「〇〇センター」とか「〇〇科学館」と名乗るところもあるとなると、いったい「博物館って

何なのか?」……まして国際博物館会議憲章の表現では、「研究・教育・慰楽の目的で、文化的・科学的に意義のある収集資料を保管し、展示する常設機関はすべて博物館」としているし、史跡・遺跡・建造物、そして自然保護地域や自然景観地域をも博物館の仲間にしてている。

こうなると、扱う資料の内容から歴史博物館とか自然博物館、あるいは総合博物館などと分類してみても、設置者別に私立、公立などと区分してみても、博物館って何なのか……の姿は明らかになってこない。種々雑多な存在である博物館……そこに「物」がある。だからこそ、自然にあるがままの山ひとつさえ博物館であり得る……となると、物の内容は何であれ、博物館とは何か……を目的・機能面から追求すべきであることだけは確かである。博物館が目目される時代になったとはいえ、この一番素朴で根底となる「博物館とは何か」の論議が、あまりにも忘れられすぎていないだろうか。ほんとうに博物館って、何なのさ? (S.O)

岐阜県歴史資料館

▽ 500 岐阜市夕陽ヶ丘4番地
TEL 0582-63-6678

郷土史研究のセンター /

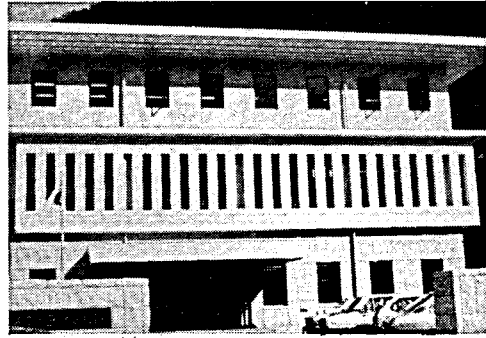
金華山のふもと、夕陽ヶ丘に戦国の城郭風建築をとり入れた三層白亜の近代建築がある。県内の古文書・行政資料の保存・研究等を目的とした「史料センター」であるこの「岐阜県歴史資料館」が開館したのは昭和52年7月1日のこと。

二億三千六百万円の工事費をかけたこの建物、文化庁の指導によって定温・定湿の空調設備やハロンガスによる消火設備を備え、間仕切りは校倉式、各部屋の入口には「ネズミ返し」なるものもついている。1Fには(事務室・館長室)小会議室・民俗文化財収蔵庫の他、車がそのまま建物内部に入れる解荷ホールの左右には修理室・整理室があり、その奥に殺虫殺菌燻蒸室がある。

外気温の影響の少ない中間階である二階には特別収蔵庫、図書室・閲覧室・フィルム保管庫、撮影室・マイクロフィルムリーダー室等があり、三階には収蔵庫、大会議室、複写室、視聴覚室などがある。整然とした管理施設は、とにかく一見の価値があるが、収蔵資料もまた大変なものだ。大きく3つに分けて紹介しよう。

まず1つは、公文書・行政資料である。各村明細帳、明治24年の濃尾震災文書、筑摩県高山出張所文書、そして兵籍簿。岐阜県の兵籍簿は日露戦争以来のものが残っており、全国的にも珍しいケースである。

第2に、古文書等の歴史資料。美濃郡代笠松陣屋堤方役所文書は、名古屋大学高木文書と共に有名な治水の重要文書である。さらに、斉藤道三に追われ、土岐家最後の美濃国守護になっ



(城郭風近代建築の歴史資料館正面)

た土岐頼芸の書状や徳川家康の書状を含む「谷家(養老町)文書」。江戸時代一度も改易転封のなかった美濃唯一の大名、東濃苗木城主遠山家は、明治維新の際諸藩に先がけて家祿を奉還、士族の帰農を行ない、さらに廃仏毀釈を断行した藩であり、藩政日記をはじめとするその所蔵文書は注目されている。その他、飛騨郡代高山陣屋文書、内田家文書、不破家文書等々、郷土史研究には格好の資料の宝庫である。そして、岐阜県史編集のために撮影された文書類のミニコピーフィルム(35コマ)12,000本、古文書、古記録等の写真10,000点も収蔵されている。

第3に民俗資料として、伊自良村今村嬉喜氏から寄贈された農機具50点、柳津町青木久太郎氏から寄贈された生活用具400点がある。

資料等の館外貸出しは、特別な場合を除きなされていないが、複写・撮影は、所定の手続きを経れば許可される。用紙・フィルム等は持参すること。視聴室では、郷土の伝統芸能等を録音収取し視聴することができるし、リーダー室では、古文書等を撮影したフィルムを拡大して読んだり、リーダープリンターで必要なものはその場でコピーがとれる。郷土史研究のセンターとして、多くの方々の利用が望まれる。

日曜日・国民の祝日、年末年始(12月28日～1月4日)は休館日。平日は午前9時から午後4時30分まで、土曜日は正午までが開館。

岐阜駅よりバス・電車で公園・高富方面行約15分、本町1丁目で下車、徒歩約8分、自家用車は一方通行のため公園から南進すること。

(古田)

日本愛石館

〒 501-06 揖斐郡揖斐川町昭和町
TEL 05852-2-0377



(正面入口)

当館は、揖斐川町西方の徳山バイパス沿いにある平棟の純和風造りである。生みの親である故小林宗一氏は、かつて山口誓子、荒川豊蔵、棟方志功氏など、わが国斯界における代表的な文化人と親交があったことから、昭和35年(1960年)に町愛石会を設立された。その後、生前に収集・贈与された鑑賞石などを、社会教育施設の一機関として、広く県民に公開し研究の場とするために、昭和42年(1967年)に本館が開設された。

現在、敷地は数人の共有地で、有限会社として運営されているが、その奉仕精神を受けつがれて来た文治氏が、小森館長らとともに、目下館諸施設の整備、収蔵品の学術的分類、展示法の工夫等をめざして研鑽中であるといえます。収蔵品は約4,500点に達し、大半が全国からの特産石、郷土の「さざれ石」や菊化石などの鑑賞石・形象石で示されているが、ほかに、化石類が約20点、外国産を含む 鉱石類が約30点、個人依託の民具や古陶器類約60点も陳列されている。

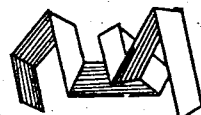
そうした中で、この館園でしか知見できない

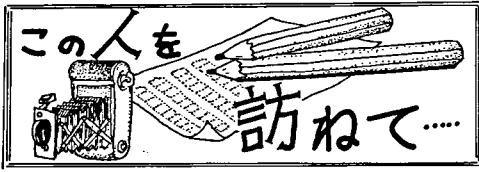


(館内展示室のようす)

と思われる「さざれ石」は、大小の小石が蜂の巣型にくっついたようで、白亜色の美しさが見学者の心をとらえて離さないようである。この石をめぐる春日村の藤原石位左衛門と「君が代」発祥との歴史的学問的な関係や、生成原因について、当村近くの揖斐川河岸付近の水成岩の一種である鐘乳石が、乳化・凝固して形成されたものというものの、その地質学的な解明など、今後に残された課題も多い……と聞かされました。この件に関しては、県の関係機関や文化庁等による本格的な調査研究を要請することも肝要なことであろう。いずれにしても、本石が県の特別天然記念物に指定されているうえに、将来国の同格指定にでもなれば、当県内ばかりか全国的な名石が誕生することとなり、当館園のユニークで重要な目玉展示品となるにちがいない。

年中無休ということもあってか、来観者は月平均100人を下まわらないとのこと、今後、館園自身が情熱をもってとりくんでいける「さざれ石」をめぐる学究的な研究課題を保有している魅力ある館園の一つである。(田中)





その2

秋神温泉山村資料室

小林 繁 氏

飛騨高山から1日3本、久々野駅経由で濃飛バスが秋神温泉まで入っている。秋神川の最奥の小さな集落 — 胡桃島を過ぎるころ、真正面の谷間にほんの少しだけ霊峰御岳山が顔をのぞかせる。やがて白樺がスクスクとよく育った豊かな自然環境の中に、たった一軒きりの旅館が現われる。

正面玄関を入らずに、左手へ池にそって進むと、庭木にはラベルがつけられ、やがて中庭に大きな板看板「秋神温泉自然散歩村」がぶらさがっている。道案内板あり、種名板あり、こゝらで観察できる野鳥や小動物の着色図つき解説板あり、はては「カワシヅユガイ」の保護区と称する溪流、魚のつかみどりをして遊ぶ小川あり……加えてここに自然生えしていたミズナラ、クリ、カエデ類といった豊富な樹木と草本類、これに意図的に移植された植物たちが生えており、まさに野外博物館といった感じ、ざっと散歩しながら一巡するだけで40～50分はアッという間に過ぎてしまった。

さて、玄関に入ると、右手に水車が飾りつけられ、美しいクリソウの絵入りパネルが「ようこそ秋神 ～ 花の里へ」と呼びかけてくる。動物画のパネルも目に入り、秋神森の仲間への加入呼びかけも伝わってくる。森の仲間の会員には、「秋神便り」が郵送されるということだから、これはまさに友の会である。ただの温泉旅館とは、一味違った雰囲気が出た肌で伝わってくる。

「こんな山の中で温泉旅館をしながら、これまでに多くの人々と出会いました。人間は、自然とともに生きてきたはずですが、いつしかその恩恵を忘れた人間ばかりがふえ、まるで自然の支配者気どりでいる人が多いのではないだろうか。自然がいかに重要であるか、私自身が学

ばねばなりません、訪れて下さる多くのみなさん方と、心を触れ合わせ語り合う場として、また手段として企画したのが山村資料室なんです。」と語るこの人、小林繁さんは、まさしく情熱的なアイディアマンで、行動する人、そして人を魅了してやまない不思議な偉力の持主でした。



たしかに、ささやかなスペースの資料室で、村内の考古資料・風俗写真、植物標本や木の実、それに数百冊の本があるだけの展示室兼学習室といったものにすぎない。しかし、博物館は、物があって見せる……だけの施設ではなくて、そこにヒトが居て、生きて働きかける教育活動がなされる機関であることを思うとき、どんなにささやかで一室にすぎなくても、ここには博物館活動の生きたお手本があるように思える。

彼は、村内から数々の考古資料を独力で発掘調査し、収集はするは、動植物・風俗のスライド写真による資料集めも行ない、すでに一万点を越えるカラーライドを持っている。この一

部分を使って、連日連夜、山村資料室でスライド上映が行なわれ、四季の秋神、自然界のしくみ、秋神の風俗等が解説される。365日、毎夜彼の肉声による生解説である。「大変な労力だろうに、録音テープに解説を吹き込んで、自動上映など考えたら……」と指摘すると、「そんな通りいっぺんの解説ではだめなんです。見て下さる人々の顔を見て、相手に応じた話しぶりや内容に、その場、その場で合わせて解説しなければ意味がない。」との答が返ってきた。その信念のもとに、今夜も明日も、彼のスライド上映は、もう10年を越えて続けられてきた。これほど生きた博物館解説は、他にはないのではなからうか。

当地方の主産業であったワラビ粉製作用具への関心も強く、収集された一揃36点の道具類は、県の重要民俗資料に指定されているし、当時の水車小屋をそっくりそのまま庭先に移築復元までしている。手づくりの自然散歩村一名札も看板も……そしてクリの巨木に設けられた子どもの遊び用のブランコ……と、どれもこれも彼の手によるもので、まさにこの人、次から次へとアイデアと実行のスーパーマンである。秋神便りも自筆の謄写印刷で発行・発送はする。前述のように秋神の自然や風俗・考古にいたるまで調査研究はする。お客さんへの教育事業も進めるは……これでこの人、旅館の主人であり板前であり、毎日毎日泊まり客の料理の仕事も一人前以上にやっているのである。

聞けば若い頃、漬物技術の修業に京都に出たという。その時、一冬京都の寺で雲水の修業も経験している。岐阜では西洋料理の修業もし、今の秋神の味は、そうした経験からあみだした彼独特のもので、板前としての腕前も超一流である。年末・年始の4日間、彼にビタリとくっついて、この人のどこに、これだけの行動力の起爆剤がかくされているのかをさぐってみようとした。一日の仕事が終わり、ホッとする夜も10時ころになると、庭先の水車小屋へ、お客さんも家族も従業員も引き連れて大移動、火を囲み、酒を飲みかわし、夜の更けるまで歌

に語らいに……この人酒も強いし話もじつにうまい。

「文明社会にあって、ある人は騒音に、ある人は排ガスに、あるいはコンピューターをはじめ無味乾燥な機械化の中で、とにかく現代人は精神的に疲れきっている。人々は、優しい母へのあこがれを求めて、この大自然の中へ、秋神の山の中へとやって来て下さるのです。」この認識が、彼のお客さんに接する全てのこの出発点となっている。だからこそ、「この自然こそ、偉大なるドクターではないだろうか。現代社会が求めている名医ではないだろうか。疲れた人々をもし“患者”と仮定するなら、受け入れ施設としての旅館や山小屋がどんなに数多くあっても、立派な建物としてあったとしても、それだけではだめなんです。患者を親切に、こまめに世話してくれる人、——つまり看護婦が今の日本にはいないのです。自然というドクターと、自然の美しさにあこがれて訪れて下さる方々を結びつけ、満足させる看護婦——この役割が私にあるのです。」というすばらしい生きがいのある仕事への自覚が聞かれるのです。

こっちが連日の夜ふかしに眠たくてたまらないのに、料理人としてセッセと働くのを見て、まさに驚くばかりの4日間であった。たとえ小っちゃな一室の山村資料室でも、背景となる自然・民俗へのたゆまない調査研究をコツコツ進める博学の実践派人間、小林繁というその人がいて、ヒトとヒトとが物をとおして語り合う場があり、ここにはまさに生きている博物館活動の原典があるといえるのです。

建物が立派で、展示資料が貴重で数が多くても、見て下さい、見学して下さいと、ただそれだけに終わって無策な「大博物館」が数多い日本の現実を思うとき、彼のことば「看護婦がいない」は、多くの博物館関係者の心ある人々には、痛烈な皮肉として聞こえてくるにちがいない。博物館が生きているかどうかは、心臓部つまり学芸部の姿勢にあることを、彼の活動する姿から再認識させられたのでした。

(小野木 記)

煙 草 と 地 震

岐阜県博物館学芸部 水 野 一

先の49号・40号では、文化財を取り扱う人たちの参考になればと(1)保存環境、(2)資料の取り扱いについての大きな概況をのべてみました。

文化財を取り扱うものとして温湿の管理や害虫の防禦に絶えず細心の神経をもって、これを人類の遺産として保護していくことは大変なことではありますが、これらの結果マイナスの方向に向かっていく文化財の被害を人災と考えた場合、青天の霹靂のように起ってくるもの—地震・火事—などは、天災と呼んでも差しつかえないでしょう。

しかし、文化財取扱講習会(昭和52年)に参加しており、参加者の雑談の中でしたが火事や地震にしても管理所有者の態度如何によってはこれも人災ではないかという意見がでて熱っぽく話し合った日がありました。

人災と一口にいってもこれは千差万別、いろいろな形があります。けれど、展示と保管という面で大きく分ければ、外からの人災と内からの人災に分けることができます。前者は落書きや盗難、それにじかに文化財を手で触れる場合の磨滅・汚損、転倒・割割ぎによる破損などがあります。関東の博物館などであった児童による土器・勾玉の考古資料の盗難など、まだ記憶に新しいことです。

これらは、ガラスケースなどに陳列されていないもので、また仕切柵はあっても直接手でふれることのできる機会の多い文化財に見られる人災でしょう。例えば、民家・民具など狭義の民俗文化財や石像・石碑・化石岩石標本・模型・ジオラマなどに被害を見ることができます。これらの陳列の蔭になる部分—裏側や内側—に、観覧券やチューインガム、他の資料の部品などが投げ込まれたりくっついたりしています。化

石などがおびんづる様もどきになでられテカテカしたものや、巻貝の化石が剥いてあるものを見かけることもあります。

対策は、良識を喚起させるか又は触れることのできないような棚やケースに入れるとか苦心惨たんするわけですが、先例があると真似が続く心理の傾向が強いので、つねに文化財の状態を観察しながら、ゴミ・落書きなどを観覧者の目にふれさせないようにすることが肝要と考えています。また、民俗資料の陳列してあるところでの喫煙ほど恐ろしいものはありません。喫煙所をはっきり明示して利用してもらうPRは必須の事項です。

後者の内からの人災については、見方によれば、先号・先々号でのべた内容があげられますので、ここではタバコについてだけ少し触れてみます。

所有者・管理者は自らの文化財については一番の理解がありますので思いのほか安心感がついてまわっています。その安心感が資料に接するとき大きな落とし穴となることもあります。展示物が露出しているとき、展示の入れ替え、組み替え、収蔵庫での仕事のとき、又は通路での歩きながらのくわえタバコやちょっと一服、灰皿をたとえ持って歩いたとしても、たとえ鉄筋コンクリートの建物でも、燃えそうにない資料であっても、このような場所で吸わないことが愛護の気持と考えます。

この原稿を書いている途中の2月20日、東北地方は突如震度4~5の地震に見舞われています。岩手・秋田・青森・福島・宮城各県の博物館施設の影響については、まだ詳しいことは聞いていませんが、何がしかの被害があると思われ、乗鞍・白山火山帯を足もとにもつ本県では、その文化財の管理の仕方に関する対処

が必要であろうことが考えられます。

地震は天災であるからとあきらめる前に、文化財に対して万全の備えを行うことが必要ではないかと考え、大それた機械設備などについては手がつかないものの、陳列品の保全の仕方では被害を最小限にとどめられるものについて考えてみたいと思います。

地震によって一番被害を受け易い陳列文化財は、土器・陶器・彫刻や老化した金属器などがあげられます。それも相当重量のあるものより比較的軽い資料が大きな被害を受けるようです。いずれも、展示台からころげ落ちて破損・折傷するものです。

土器・陶器・立像のように下辺が細く小さい不安定な文化財は、倒れないようにするために、内側が空洞であれば砂袋などを入れ安定をはかる必要があります。しかし、内部をみせるような文化財や長頸壺・立像などのように砂袋の入れられないものについては、底に坐ぶとんを敷くとか外部から手ぐすを張って固定する方法を考えねばなりません。ところが接着剤を用いて修補した土器や木器は、しっかりと張ってありますと材質の吸湿や地震の振動ではかえって傷をつけるもとにもなります。また、展示品は見ての問題もあり、支持取付などにアクリルの切り込んだ見やすくてきれいなものもありますが、文化財とアクリル材との間を養生しておかないと、すべり落ちたりこでて表面の生地を削ってしまうことがあります。その他、展示台の小さなものを組み合わせて、その上に布をかけてあるものをよくみかけますが、組み合わせた展示台の間が開いたり、別々の力が加わったようなとき、その上にある展示物は倒れ、ころげ易くなります。

壁面に吊ってある文化財や資料などは、ピン又はヒートンが古くなっていると、ひと揺れで抜けたり折れ易くなり落下する危険があります。

近頃、レールにコロをつけた吊下げ金具が多く用いられていますが、吊り下げる資料の重量に耐えられる金具を取付けていないと、カーテンを引張ったとき経験することがあるように、

コロがはずれ落ちて下にあるものを粉みじんにしてしまうことも予想しなければなりません。

また、吊り下げた文化財や資料の下部をピン・金具などで受けておかないと、動くことによって文化財や壁面を傷つけるもとにもなります。額装・絵馬・仮面・標札・看板・パネル類には注意する事項です。

よく展示の高さについて、文化財の大小・内容にもよりますが、視線に並列（展示物の高さが目線一ほ×150cmに並ぶようにする）するよう配列し、その高さだけの間隔を文化財の両側にとることが必要であるといわれていますが、これは転倒した場合他の文化財に被害（二次被害）を与えない防禦手段とも言えます。

このような間隔を大きくあけることが難しい液漬標本などガラスやアクリル材で密封したものについては、移動したり震動があったあとにホルマリンの流出がないか確かめる必要がありますが、近ごろは底部と胴部を観覧者側からは見えないようにアームで固定し、震動や移動でもひずまないようにする支持台が生まれ便利になってきました。

目線の位置に持ち上げ、裸展示が行ってある彫刻・石仏・岩石・化石・土器などは、当然倒れることのないように養生してある筈ですが、床が板材の場合、子供の跳びはねや突き当ることによって、地震でなくても倒れることがありますので注意が必要です。移動式の仕切ロープを縄跳び替りに使ってひっきり支持柱が倒れ、それによってのぞきケースのガラスが破れ、その破片で著名な蒔絵に傷がついたという例もあります。このような予想もしない状態は地震と同じようなものではないでしょうか。

岐阜県は津波こそありませんが、地震のほかには台風・山崩れ・落雷・地盤沈下等の天災とも呼ぶべき災害は、やってこないとは言いきれません。

しかし、これらを考慮した展示や保管をおこなっていくとき、文化財愛護の精神は更に一層の高まりを見ることができるとは思っています。

博物館とシンポジウム

瑞浪市化石博物館長 中村 実

「開館以来3ケ年の実績のうえに研究機関としての役割を果たすため、中新生—現在を中心に、海生動物の時間的・空間的変遷のすじみちをたどるとともに、情報の交換・連絡提携につとめ、社会の要請に応えられる館活動を推進する。」

これは昨年、私のところで開催した、第1回「瑞浪シンポジウム」開催の主旨である。ご承知のように当館は、歴史も浅く、人員・予算も極めて小さな規模であり、貧弱な存在である。しかし如何に小規模であろうと博物館として存在する限り、博物館としての役割を果たしていく義務があり、その機能を高めさせていくことが私に課せられた責務でもある。そう考えてくると、単なる観光施設であったり、古いものを集めて保管する場所・珍しいものを見せる展覧会的なものでよいというわけにはいかないのである。

博物館活動の中で、特に調査・研究活動はいろいろな条件によって制約され、余り重視されていないように思われる。しかし来館者を眺めてみると、うっとり展示に見とれ、あるいは感激の面持ちで帰る人など、学問は決してかた苦しいばかりでなく人々を魅惑する美しさをもっているものであることを証明してくれる。このことからして、博物館での研究活動が積極的に進められなかったなら、多くの人々を納得させ感動させることはできない。真の意味で住民にとっては魅力のない博物館になってしまうのではないかと危惧するのである。

その意味で当館では調査・研究活動を重視しているのだが、所詮一人の嘱託学芸員と一人の学芸員補を配しているにすぎず充分な機能を果たしているとはいえない。従って、大学・学術団体等外部の研究者と共同研究を組み、相互の提携を強め協力を得ることを第一にしなければ

ならないと思ったのである。このような研究者と博物館の交流によって、絶えず新しい情報を市民に提供することができると考える。

しかしながら、地方の小さな博物館が「シンポジウム」などと云ってみても、財政的にも乏しく第一そんなことが開催できる環境すら醸成されていないのが現実である。しかし、これらが克服できたのは市の中核にいる人達の姿勢である。「羽根田館長（元横須賀市立博物館長）の云われたことを思い出してみよ。博物館は規模ではない。貧弱な博物館であるが故に開催に意義がある。」これを云ったのは他ならぬ市長である。

私が市長・教育長に同行して横須賀市立博物館を見学した際、羽根田館長がいろいろご指導下さったが、その中で「博物館は建物ではありませんよ。建物には随分金をかけるが内容のものもない博物館をよく見かける。これらは本来あるべき姿の博物館とは云えません。要は、意欲のある職員を配し、そこで彼等に何をさせるのかを決める。そして、博物館の進む方向が本当に一般住民の要請に応え、それにそった仕事を進めるなら、その館は大きく発展するでしょう。」こんな意味のことを云われたと思う。過去4年間の実感として、なんと重みのある表現であろうかとしみじみ感じ入っている。

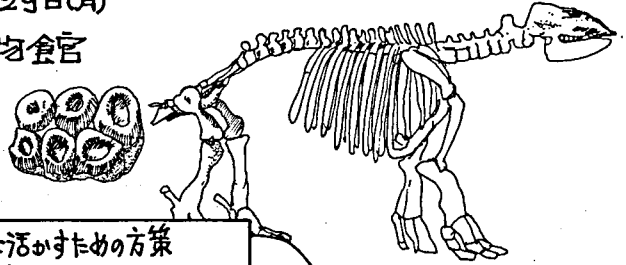
このシンポジウムで討論された内容は、記録として当館の研究報告に掲載して広く一般に公表し、さらに展示・普及活動の中に活かしていかなければと考えているが、それが例えストレートに展示や普及活動に結びつかないとしても、それなりに大きな収穫であったと思う。特に、この博物館のために寄せられた各方面のご理解、全国各地の方々のおたまたかご支援には深く感銘している次第である。

昭和53年度 自然系学芸員研修会「研究と展示」内容の案内

1978年 5月27日(土)～5月29日(月)

於; 瑞浪市化石博物館

定員; 35名 (申込順)



研究集会 (シンポジウム)

テーマ「博物館の調査研究を展示に活かすための方策
～とくに地域社会との協力について～」

館員わずか4名の瑞浪市化石博物館、新しく出発したばかりの平塚市博物館……いずれも地域社会に根づいて、生きた調査・研究に、収集・普及活動に……と、すばらしい博物館の姿をみせてくれています。この2館の経験に学ぶために、瑞浪市化石博物館嘱託、糸見川淳二博士(名古屋大学助教授)、平塚市博物館学芸員長小島弘義氏の講演のうち、各地各館園の実情や経験を通じて討論し、地域の博物館の、これからの発展の途をさぐるものです。
※この成果は、日本博物館協会から、報告書として出版されます。

地域の博物館の発展のために!!

化石採集と化石の補修の実習

採集が禁止されているこの地で、今回とくに博物館の展示資料提供ということで、工事中に出た化石が採集できることになり、糸見川先生の同意も得られます。
また、大阪市立自然史博物館学芸員、梅野博幸氏の指導により、もろい化石の補強、こわれた化石の補修、材料の選び方と入手の仕方などの実習が行われます。

参加者には、糸見川先生署名入「日本列島の歴史」

東濃の地学散歩
展示解説—瑞浪の化石のはなし—
瑞浪の化石と地層
(瑞浪市化石博物館刊)
などの文献資料が送呈されます。

持ち帰ったら 展示に活用

野外見学

「みずなみ」の近く、旧中仙道に沿った細久寺は、雨量が少なく強い酸性土壌……ここに特殊な植物が遺存しています。大阪市立自然史博物館学芸員 瀬戸剛氏の指導による植物見学を通して、自然保護について博物館が果たすべき役割について考えます。

また、糸見川先生の指導による陶土層の見学を通して、人間の自然利用・自然と産業とのサザワリについて考えます。

参加者には、地元陶芸家の作品が送呈されます。

珍しい植物と陶土層

※以上に紹介しましたような、すばらしい三つの内容を柱とした学芸員研修会が計画されています。地学担当の学芸員はもちろんのこと、それ以外の学芸員こそぜひ、……そして、地元岐阜県内からこそ多数の参加が望まれます。ご関心のある方は、早目に申込みを……!!

◎ 問い合わせ、その他参加についての詳細は、日本博物館協会へどうぞ!



〒103 東京都中央区日本橋 茅場町1-10-1
浦上天珠堂第一ビル内
TEL. (03) 669-2221

出 合 い

短歌 博物館賛歌・追憶の抄をめぐる

明方村立博物館長 金子貞二

展示の背景には、哲学がなくてははいけません。展示物には、ヒトの心が通ってはいけません。珍奇なものを、ただ並べて見せるだけなら、露上のガラクタ市と変わりません。たとえそれが、捨てられ放り出されたささやかな生活具のひとつかけらであっても、その「モノ」としての価値を生かし、人々に何かを語らせるのは、「物」そのものもさることながら、やはり展示する博物館人の哲学であり思想であり、心であるのでしょう。

去る2月26日、雪深い山国に、美しい合唱曲「博物館賛歌」が流れました。博物館の「物」を、これほどまでに心暖まる感情をもち込んで人々に迫らせているのは、他に例を見ないのではないのでしょうか。館長金子先生に、博物館賛歌あれこれを綴ってもらいました。すばらしい展示解説のひとつのあり方ではないでしょうか。

編集部

表示したり、図示したり、できるだけ努力はしてみるものの、それも片手間では、なかなか満足なことはできません。説明があったら、といった声を聞くにつけても、悩みは深まるばかりです。

解説を放送で流すといったことも、かえって迷惑になるかもしれません。誰もが久しぶりに独りになって、物の語り口に耳を傾けたり、物にまつわって湧き出るもろもろの思いにふけりたいと思われるでしょうから。

そんな時、ふと案づいたのは、物にかかわる私なりの追憶を短歌にしてみたらと、いうことでした。それを物の側に置けば、もしかしてどなたかの心にとまって、よりよいその方の歌が聞かせてもらえるかもしれないと思ったのです。

早速、58首の腰折を小さな和紙に書いて掲げました。

うれしかったです。もう4人の方から、それぞれ一連の短歌が寄せられてきたのです。

つらねあるひと品ごとにことばあり今なき
人の声ひしひしと 村井 正蔵
かなぐつ屋の千代さんが着しニコニコの柄
を羨しみき地織綿のわれは 上杉 くみ
猫のため冬のひと日をいずみ編む老いの背

中のかがまりるしか 日下部節子
ふるさとの忘れられゆく素朴さに逢へてう
れしき資料館にて 木戸口純子
また、歌が出ていると聞いたので、若い娘を
みんな連れてきました、とって洋裁学校の先生が
来られました。

それは、9月の初めのことでした。音楽の指導主事の田中鴻一先生が、館内を回っていて、この短歌に曲がつけてみたい、とおっしゃった。そして、昨年暮、追憶の歌8首と昭和45年に書いた博物館賛歌の中の2首に曲をつけて持ってきてくださいました。

こたつで向かい合って、先生のお歌を聞きながら、これが私の歌なのかと思うと目頭が熱くなってきました。ああ、やっぱり短歌というものは、元来歌われるべきものなのだなあと思いました。豊かで、澄みきった先生の心を通り抜けると、私の拙い歌が、こんなにも生き生きと息づいてくるのです。

おとなへばそこはかたなく聞えくる物のさ
さやきちちははの声
夜すがらの自慢ばなしや愚痴ばなし話し抜
れて物みな黙す

この賛歌2首は、去る2月26日の、村の文化



(青年団諸君による合唱発表)

をとめごの吐息溜息秘めしまま冷えて錆び
 たるふところ鏡 — ふところ鏡 —
 紅皿に紅ひからびてぬばたまの丈なす髪の
 しのぶよしなく — 紅皿 —

馬の背の籠に春蚕の繭がのり青葉がくれの
 峠の道を — 繭籠 —
 糞尿を背に堀越を登りつめ瑠璃色の茄子も
 ぎて帰りし — 肥桶 —

祭で、青年諸君が発表してく
 れました。

黒の歯並やさしき母の像を持
 つわれに見飽かぬお歯黒の壺

— お歯黒壺 —

味噌玉は踏唐臼にかさかさ
 と崩れて胞子のうすやに満てり

— 踏唐臼 —

圓伊裏火にさしくべられて傾
 ぎたる片手土鍋に味噌焦ぐる
 音

— 味噌焼き鍋 —

いかならむ婀娜たる顔の宿り
 しか水盛りてみむ旧りし耳盥

— 耳盥 —

≡ 県内 ニュース ≡

山岡町に『郷土史料館』計画

山岡町では、昭和51年10月から、町史編さんが進められています。同町合併20周年記念事業として進められているもので、収集された古文書・遺跡からの出土品などを保管・展示するために、『郷土史料館』建設が計画されています。来年度の事業で、公民館横に防湿高床式鉄筋コンクリート一階建・延べ面積160㎡の予定です。

旧東海中央病院内に 考古資料室が……

東海中央病院が新築・移転したのにもない、旧病院建物が、各務原市の「保健教育センター」として生まれ変わることになりました。地下には、生涯教育にかかわる学習室などが設けられ、

2階に、資料室が設けられることになりました。

各務原市蘇原支所三階に設けられていた考古資料・民俗資料室が移転するもので、これまでのように事前申込みによって開館される不便さがなくなり、交通の便にも恵まれた常設館への発展が期待されます。

中学生広場に 『博物館へ行こう』連載

すでにお気づきの方も多いことと思いますが、岐阜日々新聞では、以前の進学のページが、中学生広場と改称され、生活指導面が強化され週2回となりました。昨年4月以来、この紙面に週一回「博物館へ行こう」が連載されてきました。この3月半ばで、県内の博物館やその類似施設等が約30館園登場しました。協会発行の岐阜県の博物館要覧を土台に、中学生及び家庭向け、そして教科学習指導的な内容面を加味した記述で、好評のようでした。

編集後記

☆道端に、オオイヌのフグリの青く小さな花がほころび、着実に春が訪れてきました。№39～40、そしてこの41号で、一年分を……と頑張りましたが、編集子のひとりよがりではなかったか……と反省しています。

☆この人を訪ねて……の小林氏の一言一句、あるいは、展示品に短歌を添えられたすばらしい解説のひとつのあり方を思いつかれた金子先生の一文一句……博物館とは何であるか……の基本理念があふれているように思われますが……
☆そして、瑞浪市化石博物館長中村 実氏の格調高き使命感に燃えた「博物館とシンポジウム」と、今回は読みごたえが、味わい深いものが揃ったと自負していますが……

☆館長以下、学芸員補一人、嘱託学芸員一人…このわずかな館員を擁するにすぎない瑞浪市化石博物館が、調査・研究に、収集に、あるいは友の会活動の観察会や学習会、さらにはシンポジウムや各種出版物等による普及事業にと、どうしてあれほど活発に活動できるのでしょうか。その解答は、中村館長の「博物館とシンポジウム」に語り尽されています。今さらながら、博

物館とは、建物ではなくて、そこにいる人であり、館員の情熱と理念そのものであることを、しみじみと知らされました。

☆く学問は、決してかた苦しいばかりでなく、人々を魅惑する美しさをもっている……} 何とすばらしい文句なのでしょう。研究活動を忘れた展示が、空々しく軽々しいものであることは当然で、今号巻頭博物館の目、「博物館とは何か?の論議を……」を、あらためて聞きたい。
☆水野先生曰く「博物館学～などと銘をつけていただき、ビクビクしながらその日まで綴ってききましたが、講習会の受け売りでお恥ずかしい限りです。文化財を研究されている各位、さらに文化財を管理・保管していらっしゃる皆様方の、生の報告をこそぜひ本誌でお聞かせ下さり、またご感想・ご意見ご叱責ご教導をお寄せ下さるようお願いします。」とのことでした。
☆公共投資、公共事業優先……の掛け声よろしく、国も地方公共団体も、大風呂敷の予算編成ですが、相も変わらず道路だの何だの……まるきし発想の転換がない。博物館やその類似施設等の充実拡充、発展策……こうした精神文化活動への公共投資・公共事業推進は、これといったどうナッテン…の? ヒガミマスネーク

目 次

博物館の目	博物館とは何か?の論議を	1
館・園紹介 №36	岐阜県歴史資料館	2
	日本愛石館	3
この人を訪ねて その2	小林 繁氏	4
博物館学あれこれ その8	煙草と地震	6
	岐阜県博物館 水野 一	6
	博物館とシンポジウム	8
	瑞浪市化石博物館長 中村 実	8
	自然系学芸員研修会「内容」の案内	9
出合い — 短歌	博物館賛歌・追憶の抄をめぐる — 明方村立博物館長 金子貞二	10
県内ニュース		11
編集後記		12